

2018. 12. 27

日本コミュニケーション学会 九州支部



ニューズレター No. 32

目次

1) 支部長挨拶と次回の支部大会の情報 4年間を振り返って (支部長: 池田理知子)

2) 支部大会報告

- ①開催校からの挨拶 (日本文理大学 副学長 橋本堅次郎)
- ②5回目の大分で一第25回大会を終えて (大会実行委員長: 清水孝子)
- ③大分プランゲ文庫の会の基調講演とパネルディスカッションの報告
(同志社大学大学院博士後期課程 山本真知子)
- ④パネルディスカッション「別府市における多文化共生社会への道のり」に参加して
(沖縄キリスト教学院大学 仲里和花)

3) 『九州コミュニケーション研究』第16号の報告そして第17号について

(紀要担当運営委員: 平野順也)

4) 会員からのメッセージ

- ①移/異動にあたって (立命館大学 松島綾)
- ②日本赤十字九州国際看護大学への異動の報告 (日本赤十字九州国際看護大学 高瀬文広)

5) 支部会員の出版図書を紹介

青沼智、池田理知子、平野順也 (編)

『メディア・レトリック論 文化・政治・コミュニケーション』

(久留米工業高等専門学校 横溝彰彦)

6) 編集後記

1) 支部長挨拶と次回の支部大会の情報

4年間を振り返って

支部長：池田 理知子（福岡女学院大学）

来年の3月、支部長の任期が切れます。このニューズレターが任期中最後の号になりますので、この場をかりて皆様に最後のご挨拶をさせていただきたいと思います。4年前に九州支部長を仰せつかったときには、東京にいた私が今は福岡にいるという当初は予想もしていなかった展開に自分自身が驚いています。公私ともにさまざまなことがあった4年間でした。

振り返ってみると、任期中の最大の「山」は熊本・大分地震だったように思います。2015年4月14日と16日に震度7の揺れが襲い、避難所生活を余儀なくされた人たちの何か役に立てないかと、九州支部では独自の募金活動を行いました。九州支部のメンバーはもちろんのこと、それ以外のJCAメンバーも含めた多くの方の協力で12万余の義援金が集まり、熊本大学と熊本学園大学で、それぞれ役立ててもらいました。その年に予定されていた熊本大学での支部大会も、滞りなく行うことができました。運営委員の皆さま、特に大会実行委員長の平野順也先生のご尽力には頭が下がります。あらためて、災害という危機のなかにあって大切なのは人と人とのつながりなのだ、ということを実感することができたような気がします。

支部大会を統一テーマで行ってきたこと、しかもそれぞれの大会で充実した内容のディスカッションができたことも忘れられない出来事です。2015年度の水俣での大会では「環境問題とコミュニケーション」、2016年度の熊本大学では「記憶と未来：71年目からの戦後史」、2017年度の純心女子高等学校では「記憶の継承：コミュニケーション学の視点から」、2018年度の大分では「記憶の継承 PartII：コミュニケーション学の視点から」をテーマに、すべての大会で午後に行われた講演やシンポジウムを一般公開として開催してきました。「公害」「戦争」「記憶」をキーワードに、学会内だけではなく、多くの市民の方々と対話できたことは、学会の活動を広く社会に開くという意味で重要なことだったのではないのでしょうか。今後もしばらくこの方針を続けていってほしいと願っています。

副支部長の清水孝子先生をはじめ、多くの人たちの協力と支援に支えられた4年間でした。本当にありがとうございました。

来年の支部大会は福岡女学院大学での開催を予定していますので、そのときにまた皆様にお会いできるのを楽しみにしております。

第26回九州支部大会のお知らせ

第26回九州支部大会を福岡女学院大学（福岡市南区）で開催します。
開催日時や大会テーマについては、決まり次第お知らせします。

2)支部大会報告

①開催校からの挨拶

橋本 堅次郎（日本文理大学 副学長）



日本コミュニケーション学会九州支部第25回大会の開催にあたり一言ご挨拶を申し上げます。

さて、経団連で2001年から行われている「新卒採用時に関するアンケート」によりますと、採用選考時に重視する要素の第1位は2004年以降「コミュニケーション能力」であることは、皆さまご承知おきの事と存じます。

しかしながらこの数年、企業の方とお話し、実際に企業研修で30代から40代の監督や初級管理職の方とご一緒してみると、職場でマネジメントをしていく側のコミュニケーション能力が低下しているのではないかと感じる事が多々あります。

私は企業に入社し、社会人としてのスタートを切りました。当時の組織構造はピラミッド型といわれるもので、階層が下に行くほど人が多く、階層が上がれば多くの部下を持つという組織構造でした。しかし1991年のバブル経済崩壊後、採用抑制と中高年社員のリストラが行われ、その後も社員の採用は抑制され続け、組織構造はピラミッド型から矢じり型の組織に変化していきました。



会場は大分駅前のJ:COMホルトホール大分

その結果どのようなことが起きているかというと、管理職になっても部下がいない、またはいても数名という状況が多く企業で見られます。つまりピラミッド型の組織の時代は、主任から係長そして課長へと階層が上がれば部下が増え、コミュニケーション能力を自然と身につけていく環境がありました。しかし矢じり型の組織になったことで、部下や同僚、上司とのコミュニケーションを苦手とする監督職、管理職が増えてきているようです。

今後、少子化、IT化の進展、グローバル化と社会が多様化していく中で、今以上に若い人だけでなく社会人全体にコミュニケーション能力を高める工夫が必要とされているのではと、強く感じております。専門家の方たちを前にして恐縮ですが、社会人にとって「相手を理解する力」と「自分を伝える力」「相手の意見を引き出す力」を高めることが必要とされているのではないかと考えております。

このような時代背景の中、日本コミュニケーション学会の先生方の様々な研究成果が大いに期待されているのではないかと強く感じる次第です。

本来であれば、皆様のお顔を拝見しながらご挨拶を申し上げたかったのですが、所用につき参加できないご無礼をお許し下さい。

最後に日本コミュニケーション学会九州支部大会のご盛会を祈念し、挨拶に代えたいと思います。有難うございました。

2)支部大会報告

② 5 回目の大分で—第 25 回大会を終えて—

副支部長・大会実行委員長：清水 孝子（日本文理大学）

第 25 回九州支部大会は 9 月 22 日（土）、大分市の「J:COM ホルトホール大分」で「記憶の継承 Part II—コミュニケーション学の視点から」を大会テーマとして開催されました。一般公開された基調講演のほか、学会員他による研究発表が 8 件、パネルディスカッション 2 件があり、参加者総数 40 名ほどで盛会のうちに幕を閉じました。

3 年前から九州支部大会では「公害」「戦争」「記憶」をキーワードに議論を深めてきましたが、GHQ が占領下で検閲した新聞や雑誌の中から大分で発行されたものを読み進めている「大分プランゲ文庫の会」代表の白土康代さんに、「記憶の継承 地域の共有財産としてのプランゲ文庫」と題した基調講演をして頂きました。「検閲の跡をたどることで占領軍が日本人をどうとらえ、どこに関心をもっていたかがみえる。土地に根づいた記憶を継承する意義ある資料」と強調されました。基調講演に続き、代表を含む 3 名の会員に、「プランゲ文庫」の資料とどう向き合っているかをそれぞれのパネリストの視点から紹介していただきました。白土さんは、当時の人々の思いを伝える方法として、復興期に人々を励ました歌を再現しました。大分放送(OBS)で番組制作に携わる佐藤陽子さんは、「プランゲ文庫」の資料から GHQ が別府市の紙芝居まで検閲していたという事実注目し、OBS ニュースの特集「つなぐ戦争の記憶」の一部など、3 つのニュース番組を紹介されました。また、別府の歴史を研究されている小野弘さんは、戦前・戦後の別府の歴史をひもとくために「プランゲ文庫」と関わってい

ることなどをお話しされました。「大分での取り組みのようなことは他県にもあるのか？」など、多くのフロアからの質問や意見から、このパネルディスカッションへの関心の高さを感じることもできました。

私が思う「大分プランゲ文庫の会」の意義は、占領期の公文書等からは読み取ることでできない、当時の人々の発信力、つまり「日本をよりよくしようという熱気」が感じられるような思いを読み取る活動につながったことにあると思います。また、学会テーマから「継承とは何か」ということを考えると、「継承とは自らの視点で学び直すこと」、さらに「共有すること」も「継承」を考える上で大切なことのように思えます。コミュニケーション学の視点に立てば、「継承」の問題は、「体験者」もしくは「語り手側」にあるのではなく、それを継承しようとする非体験者である「聴き手」もしくは「読み取る側」にあるのではないかということです。戦後世代の私たちが、次世代に継承すべきことは、「これからを生きのびるために、戦争の記憶から何をどのように学び直し共有していくか」が重要になると思います。その作業が問われている今、コミュニケーション学がどうかかわっていくか、「傍観者」または「そうでない立場」なのかが問われていると考えます。



2)支部大会報告

③大分プランゲ文庫の会の基調講演とパネルディスカッションの報告

山本 真知子（同志社大学大学院博士後期課程）

「大分プランゲ文庫の会（以下、プランゲ文庫の会）」では、1945～49年に連合軍総司令部（GHQ）の民間検閲局によって検閲されてきた大分県の出版物の収集が進められてきました。コミュニケーション学の視点から、占領期の体験をどう未来に継承していくかということを考えるうえで、プランゲ文庫の会の活動から学ぶべきことは少なくありません。

九州支部大会第25回の基調講演は、「記憶の継承 地域の共有財産としてのプランゲ文庫」と題して、プランゲ文庫の会代表の白土康代さんにご講演いただきました。また、パネルディスカッションでは、「記憶の継承 Part II～コミュニケーション学の視点から」をテーマに、プランゲ文庫の会で活動されてきた白土さんと会員の佐藤陽子さんと小野弘さんより、それぞれの研究・社会活動をご紹介いただきました。白土さんからは、プランゲ文庫の会の取り組みとして GHQ に検閲された文書をアーカイブ化するプロセスとそれらを読み解く活動について、佐藤さんからは、メディア制作の立場からプランゲ文庫にかかわり、戦争の記憶の継承に向き合ってきた経験について、小野さんからは、別府の近代史を紐解く方法としてプランゲ文庫にかかわる意味について教えていただきました。

ここで注目したいのは、プランゲ文庫の会が、その土地に根付いた記憶を継承するメディアとしての意義に気づかせるだけでなく、それを次の世代へとつないでいこうとする実践の場をいかに確保していくのかを問いなおす契機を与えうるところにあります。私自身、「占領期」を考えるときに沖縄における米軍占

領下の記憶には目を向けてきた一方で、それぞれの地域に占領期の記憶があるということを認識し損なってきました。白土さんによると、埋もれた地域の文化活動を掘り起こすことは、GHQによる検閲の実態だけでなく、敗戦直後から5年間に人々が何を考え、何を考え損なっていたのかということをつかひ上げらせうるといいます。地域に刻みこまれた記憶は、「占領」にかかわる出来事を自らに引き寄せて想像させたり、〈いま・ここ〉がその「過去」と地続きのところにあるということに気づかせたりしうる点で重要だということを確認させていただきました。

また、プランゲ文庫の会による実践において決定的に重要なのは、研究者だけでなく、地域の人たちとの共同作業で取り組んできたということにあります。「記憶の継承」を考えると、どのように記憶を掘り起こしていくのかという過程の重要性に対する認識は抜け落ちてしまいがちです。さらにいえば、地域の人たちと研究者が「記憶の継承」という課題に共同的に取り組んでいくことの意義が、十分に認識されてきたとはいえません。その土地で生きた



パネルディスカッションの様子



市民の方の参加も多数

れた「記憶」をいかに新たな担い手につないでいくのかを考えるとときに問題なのは、職業や世代を超え、対話を通して、記憶を編みなおしていく〈場〉をどうつくっていくことができるかということにあるのかもしれない。

2)支部大会報告

④パネルディスカッション

「別府市における多文化共生社会への道のり」に参加して

仲里 和花（沖縄キリスト教学院大学）

1980年代後半、新来外国人（ニューカマー）が日本社会に到来し、1990年代半ばには、定住者としての彼らの問題、また彼らと共生していく上での日本社会側の問題が指摘されるようになった。そして、2000年代、こうした人々の生活は日本社会に深く根を下ろし多様な様相を見せている。別府市においても、2000年の立命館アジア太平洋大学（APU）設立以来、県内の人口10万人あたりの留学生比率が全国で京都と1、2位を競う国際都市となっている。パネルディスカッション「別府市における多文化共生社会への道のり」では、3名のパネリストがそれぞれの経験について語り、参加者との対話を通して別府市における多文化共生についての理解を深めた。

1人目のパネリスト・立山愛氏（日本語講師）は、別府市内の小・中学校に通う外国にルーツを持つ子どもたちの日本語支援を通して見てきたことについて発表した。別府市には、1つの学校に1～5人の外国にルーツを持つ子

ども達通っている。生活言語の習得に1～2年、学習言語の習得に5～7年かかるにもかかわらず、月に5時間しか日本語を学ぶ時間がない、日本語を学ぶ教室がないなどの問題や、母語と日本語どちらも中途半端で論理的思考が難しくなるダブル・リミテッドという問題を抱えていた。立山氏は、このような問題の背景には、日本語教師の6割がボランティアという現状の中で、充実した日本語支援を子ども達に提供することの難しさがあることを述べた。

2人目のパネリスト・Martin Brennan氏（元大学教員）は、ベトナム、イギリス、フランス、日本の4カ国で定住した体験をもとに、彼の2人の子どもの経験した言語習得の問題点について語った。母親がベトナム人、父親のBrennan氏自身がイギリス人だったため、ベトナムとイギリスでは言語習得の問題はなかった。フランスでは、学校で週18時間のフランス語集中クラスがあったため、すぐにフランス語を習得して正規の授業に入ることがで

きた。しかし、日本の別府市の学校では、日本語集中クラスがなく、子供達は日本語を習得するのに大変苦労した。これらの経験から、**Brennan** 氏は、日本では外国人のための言語サポートが遅れていることを指摘し、日本の学校もフランスのように言語習得のための集中クラスを提供するなど、言語習得支援を充実すべきだと主張した。

3人目のパネリスト・**Osama Ghannam** 氏（大学院生）は、シリアの紹介及び日本との共通点について発表した。**Ghannam** 氏はシリア出身で別府市に在住して11ヶ月になる。シリアはアラブ諸国22カ国の1つで、40の民族が共存している。日本とシリアの価値観には、人に対して尊敬（**respect**）の念を持つという共通点がある。また、主な産業は農業で31%の土地が農地として使用されていたが、2011年、内戦が始まり、17%の農業収入が5%まで落ち込んだ。この内戦で街は破壊され400万人が死亡した。また、食費が5倍に高騰し、家庭の所得の50%は食費に使われている。しかし、新しいシリアの再建も進み、人々は、教育、ビ

ジネス（輸出入）、観光業に力を入れている。**Ghannam** 氏には妻と3歳の子供がいるが、日本では妻はベールを被っているため職に就けない。そういう点は、日本はもっと変わって欲しいと語った。

移民者の生活を知ることによって、私たち日本社会の現状が見えてくる。3名のパネリストを通して、別府市をはじめ日本社会が多文化共生社会へと成長していく過程で直面している様々な問題点（例えば、言語習得支援の充実や宗教に関わる就職の問題など）を知ることができた。どこまで理解し受け入れるのか、といった移民者との関係のあり方は、生活の現場にある私たちが構築していくものであり、こうした関係構築の必然性が今後、ますます問われているように思う。この日本という社会を、共に暮らす人々にとって生きやすい場所にしていくさらなる努力が必要である。このパネルディスカッションを通して、共に生きる場を構築するための研究活動の重要性が、今後、ますます高まってくることを実感した。



大会後の懇親会参加者の皆さん



美味しいお料理をいただきました。

3) 『九州コミュニケーション研究』第 16 号の報告そして第 17 号について

紀要担当運営委員：平野 順也（熊本大学）

『九州コミュニケーション研究』第 16 号を 9 月に無事に刊行することができました。これも偏に寄稿していただいた先生方のご協力のおかげです。この場を借りてお礼申し上げます。第 16 号には残念ながら研究論文の投稿がございませんでした。そのため今号には査読論文が掲載されておりましたが、昨年度長崎で開催された第 24 回支部大会で研究発表を行われた青森中央学院大学の石橋嘉一先生より研究発表論文を寄稿していただきました。石橋先生は九州支部所属ではありませんが、九州支部の活動に積極的に参加していただいています。石橋先生には研究発表後も休む暇もなく、論文の修正・編集作業にご協力していただきました。改めて、石橋先生に感謝を申し上げます。

さて、第 14 号そして第 15 号に続き、地方に刻まれた記憶そしてその伝承をテーマとした「特別企画」を第 16 号にも掲載することができました。第 24 回支部大会では、久留米工業高等専門学校の横溝彰彦先生が司会となり、「被爆体験継承における異文化理解」という題でパネルディスカッションが行われました。今回の「特別企画」は、横溝先生と純心女子高等学校の新海智広先生に、パネルディスカッションでの発表をもとにした研究発表論文を執筆していただきました。これまで、戦争の記憶や平和教育というのは「被害者—加害者」という、我々にとって理解しやすい枠組みの中で語られる傾向が強かったのではないのでしょうか。横溝先生と新海先生の論文は、このような都合の良い枠組みを超えた場所で戦争の記録・平和教育を語り直そうとしたものです。

横溝先生は、高校生が学ぶ平和教育を通して、

戦争の記憶の多面的性質に着目されています。私たちが日頃語る平和というのは、「被害者—加害者」という枠組みのなかに抑え込まれているのではないのでしょうか。「被害者—加害者」という枠組みは平和や戦争をあまりにも単純な物語へと変えてしまう危険性を含んでいません。新海先生の論文は、日本で強制労働を強いられただけではなく、被爆までした中国人・韓国人の声に焦点をあて、多面的性質が無視された戦争の語りに含まれたこの危険性を指摘するものです。

第 16 号に掲載された 3 つの論文はそれぞれ興味深い内容のもので、是非ご一読ください。

さて、第 17 号への投稿も募集しています。締切は 2019 年 1 月末日になりますので、投稿を是非お願いいたします。第 25 回支部大会で研究発表された先生方につきましては、研究発表論文として投稿することもできますので、この機会に研究成果をまとめられてはいかがでしょうか。

また、第 17 号は連続企画だった「特別企画」の最終号を掲載する予定です。第 25 回支部大会では「大分プラング文庫の会」の取組みや戦後の検閲について学ぶことができました。「特別企画」は、支部大会で発表された内容だけではなく、これまでの活動を総括したような盛りだくさんの内容にしようかと計画しています。そのために、先生方のご協力をお願いすることになりますが、どうぞご理解を賜りたく存じます。第 17 号では研究論文はもちろんのこと、「特別企画」も充実したものを用意できるように取り組んでまいります。どうぞご期待ください。

4) 会員からのメッセージ

① 移/異動にあたって

松島 綾 (立命館大学)

2017年4月に立命館大学産業社会学部に赴任以来、異動報告の原稿執筆依頼をこれまで2度も時間的に困難であったためお断りしてしまっただ。大変恐縮している中、今回3度目の依頼をしていただき、ようやく正式な報告が可能となったわけだが、九州支部からいただいた依頼文書に明記してある「立命館大学への異動の報告」という題目を目にした時、異動という言葉に目が止まった。

そもそも、異動とはなんだろうか。移動とどう違うのか。辞書には移動は位置の変化を示し、異動は地位や職務が変化することであると定義してある。しかし、移動と異動はこの定義にそって厳密に区別可能なのか。区別するべきなのだろうか。すべきであるとすれば、どうしてなのか。区別可能であるとすれば、その認識を分かっ線はどのように形成されるのだろうか。というのも現代のテクノロジーでは移動と異動の分割線が明確でないからである。ロールプレイゲーム、仮名で参加できるオンラインゲーム、VRなど、私たちの移/異動の概念を壊す仕組みが現代社会にはありふれている。アバターを使ったゲームではなりたい自分に変化し自分を表象することが可能であり、想像を創造することで仮想空間での移動も異動も可能となる。VRでは想像のみでなく仮想空間での移動を身体で実質的に体現する。その体現は周りの環境にはそぐわない行動であるが、体現している本人にとっては自分が物質的に置かれている場よりも仮想空間のほうが現実的である。

このような移動と異動の分離不明瞭性はテクノロジーの発展にのみに見られることでは

ない。想像や郷愁の想い、夢なども、移/異動を可能にする。身体的な移動がなくとも、我々はあたかもその場にいるような経験をし、その場に投影する想像は自己の表象をも変化させる。また、郷愁のように、空間のみならず時間的な移/異動を可能にするものもある。そう考えると、歴史さえも移/異動に関わることに気づく。国の物語である歴史は言説を通して国の境界をも移動させるし、国の世界的地位や他国との関係も異動させる。このように、移/異動という運動の解釈の難しさは言うまでもない。

このような移/異動の錯綜を目の当たりにし、私はあらためて自身の移/異動について考えてしまう。移/異が示すように、どうやら移/異動には違うという概念が前提としてあるようだ。そして、この違いの言説には物質的なものと心理的または観念的なものが想定されている。しかし、前述のような移/異動の概念を考慮した場合、私の移/異動はどのような語りでもって表現が可能なのだろうか。つまり、「立命館大学への異動」が移/異動の区別化をはかるとき、違いが前提とされる認識的枠組みとはどのような形態をしているのだろうか。また、移/異動はある種の固定化を前提とする。移/異動すると浮遊するや放浪するが同じことではないことから明らかである。とすれば、私の異動がどのような意味をもち、どのような報告の可能性がそこで規定されているかも見えてくる。もちろん期待を裏切るような報告をあえてすることも可能だが、そのような言説もやはり期待を取り巻く言説可能性の中でのみ認識可能であることには違いない。

2017年4月に支部の所属は九州支部のまま

にさせていただいて立命館大学に移/異動した。ここに改めて移/異動の報告をさせていただき、今後も九州支部会員としてご鞭撻・ご指導を賜

りますようお願い申し上げますとともに、報告の機会をくださった九州支部にお礼を申し上げます。

4) 会員からのメッセージ

② 日本赤十字九州国際看護大学への異動の報告

高瀬 文広 (日本赤十字九州国際看護大学)



みなさま、お久しぶりです！

この度、公募でうまく引っかかって、日本赤十字九州国際看護大学の看護学部にて、教授として赴任することができました。還暦が近い年齢での異動は非常に幸運だったと思います。前任校は福岡学園の福岡医療短期大学で、2005年4月から2018年3月まで13年間勤務しました。所属が保健福祉学科という介護福祉士を養成する学科で、高校生や社会人に人気のないところでしたので、学生募集では血のにじむような苦勞をしてまいりました。小さい短大だったこともあり、図書館長、入試委員長、高校訪問企画担当など多くの役職に同時に就かないといけませんでした。学生募集のために週に1回は高校訪問しなければならなかったりして大変でした。特に困ったのが、オープンキャンパスとAO入試の多さです。毎年5月以降には月に2回開催され、常時出勤でしたので、JCAの支部大会や全国大会と重なり思うように学会参加ができない状態でした。

今回、日本赤十字九州国際看護大学に幸運にも異動ができ、状況が一変しました。学生のレベルも前任校の短大や福岡歯科大学よりも高く、学習意欲にあふれているので、非常に授業が楽しく行えております。受験生もそこそこで約3倍ありますから、学生募集で

苦勞することはありません。また、学生約100名の内、約60%が全国の日赤病院に就職し、就職率は100%。就職関係での苦勞はありません。学生の90%が女子学生、専任教員約50名の内、私を含めて男性教員はたったの5名。キャンパスは女子大学みたいになっています。まだ建学15年目で、校舎も比較的新しく、きれいな環境で楽しく勤務しております。ここは事務課の職員も先生方も優しく親切で、派閥もなく、教員間のギスギスした人間関係もなく、まるで天国のようです！

ただ難点は、自然環境に恵まれ過ぎて、大学の周りにはコンビニもお店も何も無いことと通勤時間がかかること。福岡市西区の九大学研都市から福岡市の東方、宗像市の赤間まで、JRと地下鉄、そして西鉄バスを利用して片道約2時間です。でも昔から私は早起きの「若年寄り」と呼ばれていた程なので、朝5時起きでも大丈夫です。毎日が小旅行みたいで、通勤中はリラックスして読書等に励んでいます。

勤務状態が非常に良くなったこともあり、JCAの支部大会や全国大会にも参加し易くなったので、今後は皆さまにもお会い出来るようになります。今後ともどうぞご指導宜しくお願い致します。

5)支部会員の出版図書の紹介

青沼智、池田理知子、平野順也（編）

『メディア・レトリック論 文化・政治・コミュニケーション』
ナカニシヤ出版

横溝 彰彦（久留米工業高等専門学校）

最初にお断りしておかねばならないが、私はレトリックが専門ではない。アメリカの大学院でレトリックを学んだ際には、「エイジェンシーって何？」と困惑してクラスメートと話し合っていたことを記憶している。帰国後は女子高に10年間勤務していたこともあり、研究者としての視点よりも、教育者としての視点の方が強い。このような背景を持つ私が、どちらかと言うと苦手意識を持っていたレトリックに関する書籍の感想を書いていることを、この拙稿を読んでくださっている皆さまとまず共有しておきたい。

「身近な具体例が盛り込まれており、分かりやすく面白い」。これが、第Ⅰ部「コミュニケーションの基礎」を読み始めてすぐに持った感想である。第1章「コミュニケーションと文化」には『あしたのジョー』や『仮面ライダー』が例として挙げられている。こうしてポピュラー・カルチャーを入口にして読者の心をつかんだ後に、第2章「言語コミュニケーション」でレトリックの起源やカノンを紹介しているため、「何だか分からない難しいもの」であったレトリックが身近にあるものとして再構築されていく。そして第3章「非言語コミュニケーション」では、言葉だけがレトリック研究の対

象ではないことを明確にするため、副題として「雄弁な身体と挙動」と付記されており、ジェスチャーだけでなく、衣服や化粧、流行にもふれ

ている。第2章まではどちらかと言うと具体例が男性向けであるが、第3章で女性の読者はレトリックをより身近に感じるのではないだろうか(という捉え方自体にジェンダーの問題が隠れている)。

第Ⅱ部「レトリックと政治」というタイトルは一見すると堅いイメージであるが、政治や世相を風刺する話芸のプロである漫才師が政治の舞台に轉身しない日本の風潮、政治家のゆるキャラを描いたエコバッグが持つプロパガンダ、斉藤和義が自身の「ずっと好きだった」を反原発の想いから書き替えてネットで広まった替え歌「ずっとウソだった」を例に挙げるなど、読者の興味関心を引き付けるよう見事な工夫がなされている。

第Ⅲ部「メディア表象と社会」では、広告、インスタグラム、スポーツ、障害者、性的マイ



ノリティなどこれまでよりも最近の例が多く取り上げられており、若い世代の読者はレトリックをより身近に感じるのではないだろうか。40代半ばの教員である私でも10代、20代の学生と共有できる話題が盛り込まれている。

本書は大学などの授業の教材として使用されることを想定して書かれているようで、各章末の「ディスカッションのために」というセッションで質問や課題が設定されており、授業中の意見交換や、レポートや小テストなどの準備

がなされている。筆頭編者である青沼先生がその必要性を提唱されている「教養としてのコミュニケーション教育」を実現するための書籍であろう。その考えに共感している私は、来年度に担当するコミュニケーションの授業の教科書に本書を採用する予定である。欲を言えば、前半部分に若者への訴求効果がより高い最近の事例がほしい。しかし、逆にそこは学生に問いかけて、学生がどのような具体例を身近に感じているのか教えてもらおうと考えている。

6)編集後記 横溝 彰彦 (久留米工業高等専門学校)

来年の3月で支部役員の任期が切れますので、ニューズレターを編集するのもこれが最後かもしれません。これまで6通のニューズレターを編集してきましたが、ニューズレターそのものの在り方がこれでよかったのか、議論の余地はあると考えています。年に2回の発行ということで、どうしてもタイムリーな情報発信ができないことへのもどかしさを感じてきました。フェイスブックなどのSNSやメーリングリストを活用すれば、

その都度情報を発信することができるのに、という思いがあります。しかし、SNSやメーリングリストで発信される情報は、流れては消えていってしまう傾向にあるため、支部活動の記録として継承していくためには、今のように電子版で発行してウェブサイトに掲載したままにしておく方がよいのでしょうか。何かよいアイデアがありましたら、お知らせください。それでは皆さま、良いお年をお迎えください。

発行元：

日本コミュニケーション学会 九州支部事務局

〒874-8577 大分県別府市十文字原1-1

立命館アジア太平洋大学 教育開発学修支援センター 筒井久美子

電話：0977-78-1111 メール：kyushu@caj1971.com

URL：http://www.caj1971.com/~kyushu/
